

AOYAMA OIKOS NOMOS



青山学院大学経済学部同窓会会報

2002.11.16 第6号

「第二ステージへの期待」



「神よ、変えることのできるものについては、それを变える勇気を、変えることのできないものについては、それを受け入れる冷静さを、そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵を、与えたまえ。」

これは、著名なアメリカの神学者、ラインホルド・ニーバーの祈りの言葉です。そして私

たち経済学部同窓会の元常任幹事・中田宏氏（平成元年卒——横浜市長）が市長就任の挨拶の中で引用した言葉です。

現在のような成長のための変革が期待される時代に、なんと含蓄に富んだ祈りでしよう。

会員諸氏の絶えざる支援と努力によって、経済学部同窓会もつつがなく4年目をむかえていることを心から慶賀します。少なからぬ

経済学部同窓会会長 榎本 弘

創造の「苦しみ」や「楽しみ」を経て、ようやく各学年幹事・常任幹事・担当諸委員、役員という組織が、一応出そろいました。これによって、経済学部同窓会の第二ステージへの発展の土台がなんとか形づくられたと言えましょう。

この「経済学部同窓会会報」も第6号を発刊するまでになりました。一方、大学の他の学部・学科同窓会との連携も、少しずつですが出来つつあります。校友会大学部会との関係も、その正しいあり方をめぐって今、模索中です。

こうした中で、創造と継承、そして成長と発展のための「勇気」と「知恵」と「祈り」を、同窓会の構成員全員で共有したいものと願います。

「会員相互の親睦と研鑽を図ると共に、大学および経済学部の発展に寄与する」という同窓会の目的の達成のために、思いを一つに、ステップ・バイ・ステップで着実に前進すること、これが今私たちに求められている営みではないかと思ひます。

（青山学院校友会会長）

第4回同窓会年次総会・講演会開催さる

2002.6.22（土）青山キャンパス420教室



経済学部同窓会第4回総会が、2002年6月22日（土）15:45分より、大学420教室に於いて70名の会員が出席し開催された。

本年度の総会は、「出席者の皆様に土曜日を有効に活用してもらいたい」という方針で、総会全体の開始時間を繰り下げ、講演会を総会に先立って行うことにより講演者並びに出席者への配慮と総会の円滑な進行を試みた。

15:45分より、室伏幹事長の司会で講演会が開会され、ついで榎本会長の挨拶と講師である勝部領樹氏（昭和29年英米文学科卒、元NHKキャスター）の紹介が行われた。榎本会長の紹介に引き続き、



美添泰人 経済学部学部長

勝部氏は「日本の実力、表と裏」と題して講演会を行った。元NHKキャスターという経歴と、誰もが興味あるテーマだけに、出席者は、熱心に聞き入っていた。

17:15分からは、榎本会長の挨拶の後、総会が開会され、会則規定に基づき会長が議長となり、議案の審議に入り、いずれも原案通り承認された。

18:30分からは、会場を青学会館クリノ

「変える勇気」を学んだ

横浜市長 中田 宏



衆議院議員として3期9年国政に携わった後今年4月、日本一の人口1350万人を抱える大都市横浜の市長に就任しました。

私は、青山学院で教えられた米国の神学者ラインホルド・ニーバーの言葉をいつも大切にしています。「変えられるものを変えよう、変えられないものを受け入れよう」という言葉です。

戦後の日本社会を支えてきた様々なシステムが行き詰まり、明治維新、戦後改革に続く「第三の改革期」を迎えた中、この言葉を心の支えに、全力で市政に取り組んでいます。

青山学院大学同窓生の皆さんと手を携え、本当に人間のために機能する社会システムに変えていきたい、横浜から日本を良くしていきたいとの思いを強くしています。

ンに移し、懇親会が開催された。経済学部学部長・美添泰人教授にご挨拶を頂き、建設中の相模原新キャンパスCG映像が鈴木寛也企画調査室長により上映された。最後にカレッジソングを斉唱し、盛会裡に閉会した。

経済学部同窓会会員は今……

「第9回青山学院大学同窓祭を終えて」

大田原 真美 (1988.3 経済学科卒、東京都在住)



9月23日、何とか天候に恵まれて、第9回青山学院大学同窓祭が無事に終了致しました。昨年までは、見学者として参加しておりましたが、今年は実行委員として門川先輩率いるチャペルコンサート委員会の副委員長ということで、お手伝いさせて頂きました。先輩方のお力と、チームワークの良さから、事前の準備は早々と整っており、余裕を持って当日を迎えられることとなりましたが、さて、当日フタをあけてみれば思わぬハプニングもあり、上

下にと裏方は大忙し、しかしここはチームワークの良さで、何事も無かったかのように大成功のまま終了することができました。長期間にわたる度重なる打ち合わせ、そして本番を終了してみて思いますが、同じ学舎で学んだ者同士の一体感、絆というものが、一層深まり、強くなっていったように思います。一度卒業してしまい、現実の社会生活の中へ入っていきますと、学校とは縁遠くなってしまふ方が大半だと思われませんが、こうした行事を通して、学生時代を思い出し、青山学院という共通の話題に触れられる仲間ができるということは、大変貴重な事ではないでしょうか。私はこの青山学院大学同窓祭が大学同窓祭としてだけでなく、一度でも青山学院に通われた方すべての方の同窓祭になっていくよう発展していったら、さらには卒業してからもうこういう行事があることをすべての卒業生が知り、楽しみとなり、私が本年感じることができました。一体感、絆というものを、もっと多くの卒業生の方に感じていただけたら、本当に素晴らしいことだと思います。また、是非そうあってほしいと願っています。

私たちは神のお導きにより、青山学院という場に出会うことができました。そのことを感謝するとともに、同窓祭も学院もますます発展していくことができますように、微力ですが、私自身、今後とも精一杯努めさせて頂きたいと思っております。

「国債を買ってみて感じたこと」

松下 晴紀 (1977.3 経済学科卒 東京都在住)



今年も残り少なくなりましたが、皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。

さて、私はある特殊法人で公的年金の運用を担当しており「国債」を購入しています。私は金融のプロではありませんが、素人なりに国債について感じたことを書いて見ます。

国債の格付けは、Aaaから徐々に下がり、ついにA2になりました。国債が格下げされると、価格下落金利上昇が普通です。しかし、最近はそのようなくなりました。一番の理由は他に買うものが無いということです。他の資産のリスクが大きく投資対象にならないので「質への逃避」から国債に資産が集中してしまうのです。また、国債の利益は市場価格を勘案して決められますが、全額消化できないと困りますから投資家のことを考えて、市場より高い金利で決められることがあります。この場合価格は高くなります。価格は百円が基本ですが、百円以上で買うと満期が来たとき百円との差額が償還損となります。これは決算上よくないので購入しない場合があります。

国債の購入に際しては、どうしても以前発行されたものと比べてしまいます。利率1.4%で数か月経った後、今月発行分が1.2%になってしまったら購入しずらくなり、今月は見送るか、ということになります。こうして購入を先延ばしにした結果、結局金利は上らず、年度末近くになって購入計画を達成するために大量に購入してしまうこともあります。購入までの間、資金は普通預金等に滞留してしまうので収益は生み出さないこととなります。このようなことは年単位でも発生します。今の金利が底だと信じ金利上昇のリスクを怖れて何年も購入しない投資家も結構いるようです。

このように、国債の投資環境は決して良いとはいえません。機関投資家は金利上昇を待ち望んでいると思います。



「経済学部同窓会に入会して」

伊藤 まゆみ (1999.3 経済学科卒 東京都在住)

以前より私は美味しいものを食べに行ったり、美味しいお店を探したりするのが好きだったのですが、昨年経済学部同窓会に入会し、そこで親しくなった人達と、今年の6月に飯子を食べに行ったのをきっかけに、「B級グルメの会」というものを発足しました。

メンバーは数人の小さな会ですが、1ヶ月に一回開催することを目標にしています。ホームページも近日中に公開することになりました。ホームページでは、行ったお店の場所や味の感想などを書いて、B級グルメの情報交換

「常任幹事就任にあたって」

神田 智昭 (1989.3 経済学科卒、東京都在住)

会報第5号でも報じられていることですが、ご存じの通り、先般、同窓会常任幹事として尽力されていた中田弘氏が横浜市長に就任されました。市長選にあたっては自民、公明、社民、保守党などが推薦する現職有利の予想を覆しての中田氏の当選であったために、報道でも大きく扱われ、同窓会員の皆さんも度々中田氏をテレビの画面上で見ることがあったのではないのでしょうか。私も同期の中田氏の市長選勝利のニュースを見ながら「そう言えば自分は彼に頼まれて同窓会学年幹事を引き受けたんだよなあ、貸しをつくってよかったです。でも俺は都民だから関係無いか。」などと思っていました。実は学年幹事を引き受けた時にも、その時に当時の中田氏が衆議院議員を勤めていることを知り「議員さんに貸しをつくっておくのも悪くないかな。」と聞いていたのです。

そんなわけで及ばずながら学年幹事を勤めていた私のところに今度は常任幹事を引き受けて欲しいとの依頼がありました。市長となって一層多忙になり、常任幹事を退くことになった中田氏の後任です。今度は中田氏から頼まれたのではないのですが、結局引き受けることになった今、「貸しが一つ増えたな」と勝手に思っています。

しかし私が学年幹事、常任幹事を引き受けたのは「貸し」をつくるためではなく、これはひとつの「機会」だろうと感じたからです。先日も幹事を勤めている関係で同窓会実行委員にも名を連ねることになり、その準備で思い出深い学内構内をうろろしながら、幹事を引き受けていなければ、こんなふうには学生時代を懐かしがることもなかったのだなあと思概にふけてしまいました。学年幹事として十分に働きのなかった私が常任幹事というのは、いささか荷が重いのですが、自分の出来る範囲で経済学部同窓会の発展に少しでも貢献できればと考えています。

「学院時代の思い出」

西田 篤弘 (1957.3 経済学科卒 青森県在住)



私が青山学院大学に入学した年は昭和28年春で戦後から8年経てようやく社会が落ち着き始めた頃でした。青森から東京迄、蒸気機関車で16時間かかっていた上京でした。

学院生活は何かも目新しい事ばかりで、下宿から学院迄電車と地下鉄(銀座線神宮前・現・表参道…下車)とを乗り継いで通学コースでした。当時正門から入るとウェスト(現・二号館)とイースト(現・一号館)の校舎が両側に並び、正面には岡島記念館と大学院の校舎、その真向いが大講堂で、朝8時半に30分間礼拝がありました。最初の頃は真面目に礼拝に出席しましたが、そのうちに講義の時間の関係で出席出来なくなりました。

ペリーホールの近くに本県(青森県)出身の本多庸一先生の胸像があります。「青森県弘前藩の武士の子孫で聡明で父から学問の手解きを受け弘前藩の用人となり、その後弘前に東興義塾を創立し塾長となり経営と教育に専念す。その後青山学院の院長となり、学院と東興義塾の発展につとめた」(青森県人名事典より抜粋)とあります。青森県からこのような立派な先生が出られた事は青森県の誇りであり、先生は教育とキリスト教伝道に捧げた生涯でした。

私は学院生活の中でアドバイザーグループは森文三郎先生に所属し、大学の事について色々とお指導頂きました。同時に財政学の先生でしたので、ゼミナールは財政学を選択し、U.K.ヒックス教授の財政学を研究し、卒業論文に国家予算についての文献を数多く参考にして提出しました。森先生には色々とお指導を受け昨日の如く思い出されます。森ゼミで伊豆の大室山へ旅行した時は何よりも良き思い出でした。先生はお元気でゼミの学生達を引率して下さいました。先生と私達学生の心より一層のふれあいが出来、楽しい一日を過ごしました。

卒業後は父の会社に勤務し、学院の校友会の青森県支部の事務を私が引継ぎ、年一回の校友の会合がありお互いに交流を深めました。現在は後輩の方が校友会の事務を引き継ぎ、校友会の会員も増えて益々盛んになり年一回必ず従来通り交流を深めています。これからも同窓会及び校友会支部を通じて母校の発展に役立ちたいと思っております。

をしたいと思います。B級グルメに限らず、色々なことに挑戦したいと思ひ、ただいま色々企画をしているところです。

卒業した年は全然違いますが、青山学院大学経済学部を卒業したことは同じです。皆青山学院が大好きな人たちがばかりで、毎回毎回とても楽しいひと時を過ごしています。

経済学部同窓会に入会して、色々な方と知り合うことができ、親しくなれてとても嬉しく思っています。

ますます元気、今を生きる！

「人と人、人とIT」

白鳥 泰久 (1975.3 経済学部卒 神奈川県在住)



長年住み慣れた広島を離れ、転職を機に20年ぶりに東京へ戻ってきました。都会は隅々まで、かなり変わっていました。勿論大学も外観は、しかし、キャンパスに入ってみると不思議に、なんとなく昔のままでした。学生達の会話が昔と同じだったからだと思います。ふと、フーンと独特の香、銀杏並木のにおいでした。昔と同じです。

広島支部で校友会活動に携わって20年。同窓のネットワーク作りに、ボランティア精神で積極的に関わってきました。まさに人と人との関わりです。我々の世代は、どちらかと言うとITは苦手です。便利さは認めますが、積極的に使いこなそうとは思いません。しかし、息子の代の若者は、友達感覚でITと接しています。とても真似できないと思います。

さて先日初めて大学同窓祭に参加させて頂き、入場券販売を担当しました。OB・OGの方々が実に生々と活動されている姿を見て、参加させて頂いて本当に良かったと思いました。まさにボランティア精神全開であり、人と人との関わりあいの場でありました。私は思いました。“こんな雰囲気は自分が一番好きなんだ。昔からずっとそうだったんだ”と。アハレルから生命保険業界へ、180度の転職でした。形の有るものから無いものを販売する世界への転身です。ITとは適度にお付き合いさせて頂きながら、人対人、一対一の真剣勝負の日々が続いている私にとって、この同窓祭の1日の体験は今後の我が人生の原点を見え思いました。OB・OGの方々が生々と見えたのは、本音で心から人と接しておられたからだと思います。私の場合仕事からボランティア精神だけという訳にはいきませんが。

最後に、私は、人と人との関わりを、青春を過ごしたキャンパスで、銀杏並木をバックに、28年ぶりに体験できた事をOB・OGの方々に深く感謝したいと思います。そして来年も是非又、ここにきてOB・OGの皆様と触れ合いたいと思いました。

「日本の実力、表と裏」(6月22日総会での講演要旨)

講演者 勝部 領樹氏

本学卒業後、長年に亘り報道の第一線で活躍され、数々のダイナミックな放送技術の節目に立ち会った経験を持つ勝部氏は、戦後日本の経済発展とその原因、これからの日本の方向性について、自らの経験による視点と、社会学者であり、日本研究者であるエズラ・F・ヴォーゲル氏の視点から講演を行った。

I. 日本経済と日本社会

現在日本は、「閉塞の時代」にあるが、過去には「経済的に」実力世界一を誇った時代もあった。だいぶ前になるが、エズラ・ヴォーゲル氏は、著書「ジャパン アズ ナンバーワン」で、日本が経済発展した背景について以下のようにまとめている。

(1) 日本の政治、外交は見劣りするが、官僚がしっかりしており、「官民一体」のフォーメーションを採っている、(2) 日本人の貯蓄力は、他国に比べて極めて高い、(3) 日本人は、勤勉であり、全体の教育レベルが高い、(4) 治安が良い、等である。これらは日本人も自負していた点であり、ヴォーゲルの著書は、日本人の自尊心を駆り立てるものであった。ヴォーゲルの著書が刊行された後、日本は、いわゆる「バブル経済の時代」に突入した。バブル期の日本経済の姿を簡単に整理すると以下ようになる。①1985(昭和60)年頃から、急ピッチに円高になっていった。1985年に1ドル250円であったのが、1987(昭和62)年には、123円台まで急上昇した。②国内では、消費が下支えし、品質管理に伴う生産性の向上が顕著であった。土地が暴騰し、住宅地で最高1坪約3000万円、商業地で約1億円に達したところもあった。③金融機関は、競ってカネ貸し競争を行った。日本人が海外の土地・不動産を買い始める。「金持ちエロホン」に対する(アメリカ)の批判が大きくなった。

II. 閉塞感と閉塞感

1991(平成3)年になると、バブル崩壊が始まり、金融機関は多額の不良債権を抱え、地価の暴騰、倒産企業が急増した。「ノンバンク」「住専」「不良債権」「積立補填」は、この時代を象徴する言葉である。これら一連の出来事の原因は、百人百様の見方があるが、まとめると以下ようになる。

(1) 体制(政治・経済)が古いまま(「護送船団方式」等)であった、(2) 思いついた構造改革をしてこなかった、(3) 責任のあいまいさ・自己修復能力が不足していた、等が挙げられる。ヴォーゲル氏は後年、NHKでの対談で確かにある頃は、(日本もヴォーゲル氏自身も)自信過剰でごう慢(arrogant)であった(日本の)政治も経済も古い体制のままだ」と述べている。また日銀、日本政府、経済のプロと呼ばれる人たち、マスコミ等は深く反省すべきである。

III. 挑戦者たち

日本はどうすれば立ち直る「突破口(breakthrough)」が見つけれられるだろうか。ヴォーゲル氏が言いたかったことを汲みつつ、以下に述べていきたい。

(1) 「閉塞感」の一扫。(a) アメリカのメジャー・リーグで人々に野球の醍醐味を与えている「イチロー」の活躍をヒントに「やればできるんだ」という価値観をもつこと。(b) 小泉首相の構造改革、変革の精神を実践すること。(c) NHK番組「プロジェクトX」で紹介されている、過去の先輩達(「挑戦者たち」)が不屈の魂でスタンダードを作り出した精神を振り返ること(自主的な技術開発)。(2) 国際化時代を迎えたことを背景として、今までの「純血主義」ではなく、海外からの多様な頭脳を取り入れて、有効に活用していること。

いずれにせよ、現在の日本の状況は、「誰もが乗り越えなければならない壁」であり、責任の取り方を明確にし、国際社会に通用する確固とした価値観を構築すると同時に、多様な価値観も認め、新しい「強さ」を身に付けることが、「突破口(breakthrough)」のきっかけとなる。

勝部領樹氏 略歴

- 1931年 島根県佐田町生れ。
- 1954年 青山学院大学文学部英米文学科卒業。
同年NHK入局。以降、郷里の松江放送局を振出しに、主に東京社会部記者として活躍。
- 1977年 「ニュースセンター9時」キャスター。
- 1979年 「NHK特集」リポーター。
- 1988年 NHKエンタープライズ21のキャスター。
- 1993年 同社顧問。

【参考】エズラ・F・ヴォーゲル(Ezra F. Vogel)氏 略歴：1930年アメリカ・オハイオ州生まれ。社会学者。日本・中国の研究者。1985年ハーバード大学で社会学博士号取得後、研究のため来日し2年間滞在。1960～1961年エール大学教授、1967年ハーバード大学教授を経て、現在ハーバード大学アジアセンターで「アジア ビジョン21」ディレクター。

INFORMATION

- ◆2002.6.11 第7回常任幹事会 16名
- ◆2002.6.22 第4回総会 (第3年度年次総会)
記念講演会 15:45~17:15 70名
講師:勝部領樹氏
テーマ「日本の実力、表と裏」
総会 17:20~18:00 70名
以上、大学4号館420教室
懇親会 18:15~20:00 59名
アイビーホール青学会館
グローリー館 4F「クリノン」
- ◆2002.7.8 役員会 6名
- ◆2002.7.25 第1回常任幹事会 12名
- ◆2002.9.5 第2回常任幹事会 13名
- ◆2002.10.4 第6号会報編集会議
- ◆2002.10.17 第3回常任幹事会
- ◆2002.11.16 AOYAMA OIKOS NOMOS 第6号発行
- ◆2002.11.20 AOYAMA OIKOS NOMOS 第6号発送
- ◆2003.1.20 平成14年度幹事会
講演:中田 宏横浜市長
(経H1卒、同窓会幹事、前常任幹事)

平成13年度収支決算報告 自平成13年4月1日 至平成14年3月31日

| 収入の部 | | 支出の部 | |
|--------|-----------|-------|-----------|
| 科目 | 金額 | 科目 | 金額 |
| 前年繰越金 | 4,878,365 | 事業費 | 263,025 |
| 会費収入 | 3,954,000 | 会報発行費 | 565,560 |
| 同窓会収入 | 100,000 | 印刷費 | 218,027 |
| 総会会費収入 | 276,000 | 通信費 | 252,725 |
| 預金利息 | 580 | 会議費 | 22,096 |
| その他 | 2,000 | 事務費 | 826,299 |
| | | 総会費 | 241,362 |
| | | 雑費 | 4,305 |
| | | 翌期繰越金 | 6,817,546 |
| 合計 | 9,210,945 | 合計 | 9,210,945 |

会則一部改定についての案

- 第11条 (2) 幹事会は幹事会員の構成上、遠隔地会員等の委任状を含め、幹事の3分の1をもって成立し、決議は出席幹事の過半数をもっておこなう。
- 第15条 (7) 事務局長 1名 (8) 副事務局長 1名
- 第18条 役員会は会長、副会長、幹事長、副幹事長、会計委員、事務局長、副事務局長で構成する。
- 第19条 役員会・常任幹事会・幹事会は公開とし、各会議に拡大役員会、拡大常任幹事会、拡大幹事会を開催すること出来る。決議は「出席委員」の過半数をもっておこなう。
- (付則) 5. 2002年6月22日一部改定
(細則) 1. 会員の慶弔について
5年以上の年会費納入会員、終身会費納入会員が亡くなった場合は、会長名で「弔意」を表す。その内容については役員会に一任する。

以上
但し 第7章「会計」の現行19条以下は、新しく19条を加えたので、20、21、22条と繰り下げる。

第4回総会 (第3年度年次総会) 議事要旨

2002.6.22

1. 榎本 弘会長挨拶

会も3年を経過した。これまでは主として体制・組織づくりをし、また、活動面でもいくつかやってきた。組織づくりは非常に地味な仕事だが、関係の皆様は本当に一生懸命やって下さった。例えば会員の募集、新卒業生の勧誘、学年会開催の推進、会員台帳の整備といった仕事を着実にいった。活動面では、講演会、会報、定期総会、懇親会開催、大学同窓祭への積極的参加、などを行った。今後もこれらを実行していく。しかしながら、私たちの会は「ボランティア」です。各自が本業を持ちながら行いますので、最善を尽くして学校のため、我々のために行ってくださいる方々に深く感謝する。

いよいよ経済学部同窓会も4年目に入る。本来の目的の一つ、学部同窓会を結集させたいということがありますので、まだまだ道は遠いかも知れぬが、高い目標に向けて進んでいかねばならない。また「経済学部への支援」もできるだけ早期に行いたい。今後とも皆様と共に考え進んで行きたい。

本年同窓会として初めて、経済学部同窓会から、校友会の大学部会を通じ校友会評議員2名を推薦し、正式承認された(石井副会長、天野会計の2名)。これは、会と学院との結び付きの「第一歩」となる。この事が今後良い意味で発展して行くように私たちは期待する。

もう一つは、昨年末、校友会が学院と協力して『青学チャイムズ』(18万部発行の広報紙)を全校友に配布した。「卒業生こそ学校にとって非常に大きな財産である」のですから、是非実行に移すべきという事で始まった。また「青山学院校友センター」も発足、校友の為の連絡機関と位置付ける。各同窓会もセンター内にポストを設置し、学校も同窓会に非常に協力的になってきている。我々はこのようなものを十分に活用しながら、同窓会が確固として学校をサポートする正式団体として働いていく。また会が我々の「生涯教育の一環」、また「生涯学習の場」として位置付けられたら素晴らしい。今後同窓会の確立という理想に向けて進んで行けたら素晴らしい。

2. 総会議事 (第3年度会計報告) 議長:榎本会長

平成13年度事業報告、収支決算報告、監査報告、並びに平成14年度事業計画、収支予算案、会則一部改定についての案をそれぞれ審議、満場一致で承認された。

編集後記

▶第1面の総会記事、第3面の勝部氏講演要旨、第4面総会議事要旨、は花岡雅夫兄(経H7)にお願いしました。▶今回も「経済学部同窓会員は今……」として北から南から多くの方にお便り頂きました。感謝。▶第4面インフォメーションは大賀 禮事務局長にお願いしました。▶第6号編集長、門川光雄(経35)、編集員、西尾隆司(商37)、清水美子(経39)、石井信之(経41)、相川和宏(商44)、松原優子(経46)、本郷茂(経47)、梅田澄子(経48)、磯部守孝(経53)、相原一浩(経58)、花岡雅夫(経H17)。

「Aoyama Oikos Nomosの意味するところ」

石井 信之 (副会長・経済学部教授)

20世紀初頭の新しい経済学の潮流の中には、「社会経済学」(social economics)、「文化経済学」(cultural economics)、「進化経済学」(evolutionary economics)などが登場してきており、いずれもこれまでの伝統的な経済学 (political economy又はeconomics) が取り上げなかった複雑な社会文化現象をきめ細かく分析・検討することを課題として多くの経済学者をひきつけています。伝統的な経済学の中にも広く認められている分野として「公共経済学」(public economics) や「環境経済学」(environmental economics) があります。しかし、いずれの名称もeconomicsという用語は共通して採用し続けており、これからも経済学が色々な形で変容・変質していったとしてもこの「エコノミクス」という言葉は残り続けていくでしょう。日本語で経済という場合は、語源的には、江戸時代の儒学者、太宰春台(1680~1747)の執筆した『経済録』(1729)に由来するとされ、それは「経世済民」を意味するといわれております。即ち、「世の中を治め民を救うこと」がその目的なのです。経済学の父、アダム・スミス (Adam Smith, 1723~90) もその『国富論』(1776)第4篇冒頭の個所で「経済学の目的は国民と國家の両方を富裕化すること」と述べております。この広く今でも使われているeconomicsの語源が古代ギリシャの哲学者(アリストテレスなど)が使っていたoikonomikēで、分解するとoikos(家)のnomos(規則)となります。同窓会をひとつの家とみだてて、その豊かな秩序ある発展を期待して会報の名称として採用した次第です。

青山学院大学経済学部同窓会会報 第6号

2002年11月16日発行

発行者 榎本 弘

発行所 青山学院大学経済学部同窓会

(青山学院大学経済学部・石井信之研究室内)

〒150-8366東京都渋谷区渋谷4-4-25 Tel.03-3409-8111 (内線12817)

<aogaku-kei.dosokai@jcom.home.ne.jp>

皆様からの情報やご投稿は下記私書箱へ!

〒150-8691渋谷郵便局 私書箱145号